



くらはし

舞鶴市立倉梯小学校
学校だより11月号
令和8年10月30日

イチョウが教えてくれたこと

先日、子どもからこんな質問を受けました。「銀杏（ぎんなん）ってイチョウの実やろ？」不意を突かれた私は思わず「そうかもしれんなあ」と生返事。しかし、その後どうも気になりました。イチョウは確か裸子植物です。サクラやリンゴのような被子植物とは違い、果実をつくらないはずです。

落ちている銀杏を見ると、周りは果実のような柔らかい部分に包まれ、その中心には硬い殻があります。見た目には確かに「実」に見えます。しかし調べてみると、やはり銀杏は果実ではなく「種」でした。外側のやわらかい部分は「外種皮」、硬い殻の部分は「中種皮」、そして私たちが食べている部分は「胚乳」と呼ばれる部分です。なるほどと納得し、後から「あれは実ではなく種なんだよ」と子どもに伝えました。

さて、ご存じのとおり本校にはイチョウの木がたくさん植えられています。街路樹としても広く利用されています。それはイチョウが丈夫な木であり、病虫害や大気汚染に強く、長寿で火災にも比較的強い特徴があるためです。

秋になると、イチョウの葉は鮮やかな黄色に色づきます。本校でも間もなく校庭や通学路が美しい黄色に染まる季節を迎えます。かつて、ある子どもが落ち葉を見て「黄色のじゅうたんみたい」とつぶやいたことがあります。その光景を見事に表した言葉だなあと感心したことを覚えています。子どもたちの感性は、まさに詩人そのものです。

一方で、大量の銀杏や落ち葉の処理など、管理の面では大変なこともあります。地域の皆様にはご迷惑をおかけしています。子どもたちにとって銀杏は独特のにおいのために少々嫌われ者です。しかし、学問的に見ると大変興味深い植物です。

イチョウは約2億年以上前から地球上に存在していたとされ、「生きた化石」とも呼ばれています。恐竜の時代からほとんど姿を変えずに生きてきた貴重な植物です。

子どもたちに「イチョウは恐竜よりも古くからいる植物なんだよ」と話すと、多くの子どもが目を丸くして驚きます。毎日見ている木が、はるか昔の地球ともつながっていると知ると、自然の見え方も変わるのでしょう。

さらに、イチョウには不思議なひみつがあります。それはイチョウの増え方の仕組みです。シダやコケの仲間に見られるような古い仕組みを持っており、他にあまり例のない独特なものです。これもイチョウが「生きた化石」とよばれる理由の一つとなっています。

このことを発見したのは、日本の植物学者・平瀬作五郎です。明治時代に行われたこの発見は世界中で注目され、日本の科学の大きな成果となりました。

最近では、物事を詳しく調べ理解を深めることを「ふかぼり（深掘り）」と表現することがあります。今回の銀杏についても、一人の子どもの何気ない問いから始まり、調べるうちに新たな発見が次々と見つかりました。

本校が大切にしている探究的な学習も、まさにこの「ふかぼり」の学びです。地域のことや身近な自然、人々の暮らしの中から課題を見つけ、フィールドワークや外部講師へのインタビューを通して理解を深めています。

普段見慣れているイチョウでさえ、調べ始めれば多くの秘密が隠されています。子どもたちには、身近なことに疑問をもち、「ふかぼり」する姿勢を大切にしてほしいと思います。

美しいイチョウの黄葉に囲まれる11月。自然との出会いや子どもたちの素朴な疑問を大切にしながら、これからも充実した学習を進めてまいります。

校長 四方 直人